



Data 2022-89

監督・編集: 陳梓桓 (チャン・ジューン)

製作: 任硯聰 (ピーター・ヤム) / 蔡廉明 (アンドリュー・チョイ) / 小林三四郎 / 馬奈木巖太郎

👁️👁️ みどころ

2014年に大爆発した香港の“雨傘運動”は大注目を集め、民主化への期待が高まったが、結果は正反対！今や一国二制度は“死に体”状態に！

それでも陳梓桓監督は諦めず、『乱世備忘 僕らの雨傘運動』（16年）に続いて、本作を！取り上げる“3つの題材”は、①香港六七暴動、②文化大革命と香港逃亡ブーム、③六四天安門事件、だ。

時代と舞台を大きく異にするそれを、ドキュメンタリーとドラマの融合という手法で撮影したが、その賛否？成否は？



■□■ 『乱世備忘』に続いて、陳梓桓監督が香港の今を！ ■□■

1987年に香港で生まれた陳梓桓（チャン・ジューン）監督の長編デビュー作となった映画が、自らもデモに参加していた、2014年に香港で起きた雨傘運動の79日間を描いたドキュメンタリー『乱世備忘 僕らの雨傘運動』（16年）（『シネマ43』175頁、『シネマ44』318頁）だった。サブタイトルの“僕ら”の中には16歳の女の子も含まれていたが、同作を観れば、雨傘運動、ひまわり学生運動、SASPL、SEALDs等を中心とする雨傘運動の“論点”がよくわかる。

雨傘運動は、市民的不服従（良心にもとづき従うことができないと考えた特定の法律や命令に非暴力的手段で公然と違反する行為）が原則だったが、その後の香港の行方を見れば、雨傘運動の成否は？あはれは敗北？それとも・・・？また、同作の撮影が大変だったのは当然だが、同じ頃に観た、『チリの闘い 第1部 ブルジョワジーの叛乱』（75年）、『第2部 クーデター』（76-77年）、『第3部 民衆の力』（78-79年）（『シネマ39』54頁）に比べると、「少し突っ込み不足は否めないが必見！」だった。そんな陳梓桓監督が、『乱世備忘 僕らの雨傘運動』に続いて本作を！

■□■テーマは香港の記憶、現在そして未来！■□■

英語の Blue は青だけではなく、憂鬱という意味もある。「Blue day」はその典型だが、「Blue Island」とはナニ？そして「憂鬱之島」とはナニ？陳梓桓監督は、「それが香港だ」という自虐的な思いを込めて、それを本作のタイトルにしたが、本作のテーマは、香港の記憶、現在そして未来だ。

阿片戦争で敗れた清朝政府は、1842年にイギリスと南京条約を締結。そこから、中国本土とは、異なる香港の近・現代史が始まった。そして、1997年に香港の主権が中国に移行されたことによって、イギリスによる植民地支配は終了し、「一国二制度、香港人による統治、高度な自治」が始まったが以降、香港と中国本土との“微妙な関係”が続くことに……。2022年8月の今、中国本土は秋の中国共産党第20回大会の話題で持ち切り。今や香港は完全に（中国）本土化してしまったから、香港の未来は絶望だけ……？

■□■取り上げる“3つの題材”は？■□■

「香港の記憶、現在そして未来」をテーマにした本作は、①香港六七暴動、②文化大革命と香港逃亡ブーム、③六四天安門事件、という3つの歴史的な大事件を題材として取り上げるので、それに注目！

1966年に始まった文化大革命は日本でも有名な事件だから、私もよく知っている（つもり）。しかし、「文化大革命と香港逃亡ブーム」とは一体ナニ？本作の冒頭、中国大陸の都市・深圳から対岸に位置する自由の象徴である香港へ泳いで渡ろうとする男性の姿が登場するが、なるほど、文化大革命の当時にはこんな姿が……。海が荒れているために、途中で力尽き溺れて亡くなる者も多かったが、香港にたどり着くことに成功した知識青年は、香港に根付き香港の新移民となったようだ。

また、香港六七暴動とは、1967年香港左派暴乱とも呼ばれ、香港の親中派によって1967年5月に起こされた、香港イギリス政府に対する抵抗を目的とした大型暴動のこと。まさに私が大学入学し学生運動に参加したのと同じ時期に起きたこんな運動は、私も知っていたが、そこで事件は7カ月間に及び、1936人が起訴され、832人が負傷、51人が死亡したとは！

さらに、1989年6月4日の天安門事件における“戦車のシーン”は衝撃的だったが、それは本作にも登場する。さあ、陳梓桓監督は、この3つの題材を本作でいかに『憂鬱之島』というタイトルでまとめていくの？

■□■ドキュメンタリーとドラマを融合！その賛否・成否は？■□■

本作冒頭の海辺のシーンとそこから海に飛び込む男女のシーンを観ていると、本作も『乱世備忘』と同じドキュメンタリー映画。誰もがそう思うはずだが、然にあらず。本作で陳梓桓監督は、基本的には“3つの題材”をドキュメンタリーとして描きつつ、他方でさまざまなフィクションを混入させる手法を取った。そのため、文化大革命の猛威を逃れるため、恋人と共に中国本土から香港に泳いで渡ってきた体験を聞いていた若い男女が、その

後に両親や自分が香港へ来た経緯を話したり、若き日の老人たちの越境する姿を演じたりするからアレレ・・・。

また、「香港六七暴動」の老人と彼を演じる学生が撮影の合間に話したりするので、さらにアレレ・・・。他方、ドキュメンタリー映画にニュース映像が対応されるのは常だが、本作では有名な天安門の戦車のシーンをはじめとしてそれも多い。それは当然だが、さまざまなフィクションを組み入れた本作では、さらに、香港の牢獄のセットの中で、投獄された過去を持つ老人と、暴動罪で投獄されるかもしれない今の学生が、肉声で語り合うので、さらにアレレ・・・。

これらは、前述した3つの題材が、時と場所を大きく異にしているため。つまり、陳梓桓監督は世代を超えた人物を登場させることによって、3つの時と場所をうまくリレーしようと考えたわけだ。しかし、その是非は？その成否は？本作の評論で、山根貞男氏（映画評論家）は、それを「香港の叫び 魂のリレー」と表現しているが、残念ながら、私にはそれが成功しているとは思えないが・・・。

2022（令和4）年8月4日記